

4 摘み取り春菊の栽培法試験

背景と目的

市内の摘み取り春菊栽培では、葉枯れ病の発生や夏期の品質低下が課題となっています。その対策として、疎植栽培は有効な手段の一つですが、収量が減少するリスクが考えられます。そこで、栽植密度の違いによる品質と収量を調査し、導入検討の資料とすることを目的としました。

関係先 旭川青果物生産出荷協議会摘取春菊部会

試験方法

本試験は5月播種作型、7月播種作型の2作期で試験を行いました。紙面の都合で7月播種作型の試験結果のみ掲載します。

(1) 栽植密度等

	条間 (cm)	株間 (cm)	条数	床幅 (cm)	栽植密度※ (株/a)	密植区の栽植密度を 100 とすると
密植区	15	18	8 (千鳥)	120	2,133	100
中間区	18	18	6 (千鳥)	108	1,626	76 (約 3/4)
疎植区	25	15	4 (並列)	100	1,461	68 (約 2/3)

※通路幅を含めた栽植密度。通路幅は、一般的な間口3間半(6.3m)のハウスにベッドを3本設置する条件で各々算出。

(2) 収穫方法

各本数	収穫時期 (収穫部位)		
	1回目 (主茎)	2回目 (1次分枝)	3回目 (2次分枝)
収穫本数 (本)	1	4	8
残す脇芽数 (本)	4	2	—

※収穫は長さが27cmのものを対象とした

耕種概要

- ・ 供試品種：さとあきら (サカタのタネ)
- ・ 作型：無加温ハウス栽培 (側部に防虫ネットあり)
- ・ 栽培日程：播種 7月7日、定植 7月29日
- ・ 施肥量 基肥：N-P-K=2.0-0.3-0.5 (kg/a)
追肥：N=0.3 (kg/a) を液肥で3回

試験結果

(1) 一本重、茎径

一本重、茎径を全期間平均で比較すると、いずれも疎植区が最も優れました (表1)。一本重は、いずれの試験区も1回目が最も重くなりました。また、3回目は2回目に比べ気温が低く生育日数がかかったため、2回目より重く、茎径も太くなりました。

(2) 収量, 規格内割合, 本数

全期間の a 当たりの規格内収量は, 密植区が最も多くなりましたが, 疎植区の 8%増にとどまりました(表 2)。規格外収量は密植区が他の試験区と比べると多くなりましたが, 規格内割合は 93%と高く, その他の試験区は, ほぼ 100%でした。

収穫本数は密植区が最も多く, 疎植区の約 1.5 倍でした。

一袋本数は, 疎植区が最も少なく, 密植区とは約 3 本の差になりました。

表 1 一本重, 茎径

	1 回目		2 回目		3 回目		全期間	
	一本重 (g)	茎径 (mm)	一本重 (g)	茎径 (mm)	一本重 (g)	茎径 (mm)	一本重 (g)	茎径 (mm)
密植区	22.2	7.9	13.6	6.7	15.6	7.6	15.5	7.3
中間区	24.8	8.5	15.5	7.0	17.9	8.1	17.6	7.8
疎植区	26.5	8.4	17.5	7.2	21.0	8.8	20.2	8.2

表 2 全期間の各収量, 規格内割合, 各本数

	規格内収量		規格外収量 (kg/a)	規格内割合 (%)	総収穫本数 (本/a)	一袋本数 (本/袋)
	株当たり (g/株)	a 当たり (kg/a)				
密植区	156	332	24	93	23,019	10.7
中間区	198	322	4	99	18,496	9.1
疎植区	210	307	5	98	15,462	7.9



密植区



中間区



疎植区

(いずれも 9 月 23 日収穫時の写真)

考察

本試験では, 葉枯れ病が発生しなかったため, 病害対策の評価はできませんでした。

株当たりの収量は, 疎植区が最も多く, 密植区が最も少なくなりました。

面積当たりの収量は, 栽植密度が高い密植区が最も多く, 疎植区が最も少なくなりました。しかし, 密植区は疎植区の約 1.1 倍の収量(又は袋数)を得るために約 1.5 倍の収穫・調製作業を行う必要があり, 非常に効率が悪いといえ, 作業性を考慮すると疎植区の導入が有効です。